

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【海老沼小学校】

⑥	次年度への課題と授業改善策	
知識・技能	一定の基礎・基本的な知識・技能の定着に見られるも、市平均と比べてまだまだ十分とは言えない結果である。初歩的な、問われていることを正確に読み取る能力や語彙力、計算力の向上は本校の根本的な課題である。次年度へ向け、学年を越えた教科ごとの縦の系統性から下学年のワークなどを使用して集中して苦手分野に取り組む時間を朝の時間で設ける。さらに、過去の同様の問題などを例に挙げて、全員で解き方を考察する場を授業内に設定したりすることで、より多くの知識・技能を身に付けさせることが大切で必要があると考えられる。	
思考・判断・表現	引き続き、授業展開の中での協働的な学び、個別最適化した学びについての研究を全校で進めていくとともに学校課題研究をさらに深めて各教科の特色もふまえて、ICT機器や今までに蓄積してきたデータを活用することで教科間を越えた能力の育成に取り組んでいく。 (例：グラフの読み取りについて…読み取り方を算数で学び、社会や理科で活用し、国語でまとめ方や表現できる方法を身に付けるなど)	

今年度の課題と授業改善策		
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<p><学習上の課題> 算数「数と式」の乗法除法や小数・分数の問題で誤答する児童の割合が高い</p> <p><指導上の課題> 児童の実態を正確に把握し、反復・習熟させるための時間を授業内で確保することが難しい</p>	⇒ 授業内で定着の度合いを確認して実態をとらえながら、あゆみタイム(朝自習)の時間に学習進度に合わせた予習・復習に取り組む。計画的に「スタディサプリ」や「ドリルパーク」に取り組む【月3～4回程度】
思考・判断・表現	<p><学習上の課題> 根拠となる部分を引用し、自分の考えを具体的に書き表すことが難しい児童が多い</p> <p><指導上の課題> 児童が必要感をもって課題に向き合い、自らの考えを他者に伝え、自己・他者評価を通して肯定的な経験をすることが少ない</p>	⇒ 日常の中で必要感のある設問を設定しつつ、ICT機器の共同編集機能などを活用しながら協働的な学びにつながる活動を取り入れていく【単元の中で1～2時間程度実施】

全国学力・学習状況調査結果について
<小6・中3>(4月～5月)

⑤	評価(※)	授業改善策の達成状況
知識・技能	B	今年度の無回答率の低下から家庭学習での課題も含め、授業内で積極的に適用問題へ取り組ませることによって一定の知識・技能の定着は見られた。市平均と比較しても無回答率を上回ることができた。また、児童が「課題解決の為に自ら取り組んでいたか」の設問での肯定的な回答に対して、教職員にも同様の質問をしたところ、90%の肯定的回答であり、両者のあいだに差があることがわかった。
思考・判断・表現	B	授業内でくり返し、協働的な活動を表現時や思考ツールなどのICT機器を使って取り組ませたり、年間を通して十分な読書の時間と機会を設定したりすることで、深く考えて答える問題についての無回答率が0に近づけることができた。教職員の回答からも一定の成果を実感する肯定的な意見が得られた反面、児童の回答傾向には個人差がみられた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では熟語や漢字そのものの定着が不十分で、新出の語句を丁寧に指導し、語彙力を高める取組が必要であると考えられる。算数においては、四則計算のうち、除法の誤答が多く計算方法を正しく身に付けられていないほか、表とグラフでも見方がわからず、数値を正しく読み取ることが難しい児童が見られる。基礎的な知識・技能については国語や算数だけの時間だけでなく、社会をはじめ他教科とのかわりから必要感の高い資料などを扱い、正確な数値の読み方や変化の様子をとらえられるよう意図的にくり返し指導する機会を設ける。日々取り組んでいる授業や宿題でも、基礎的計算力や語彙力を高められるような取組(計算ドリルや読書活動、意味調べなど)を大切にしたい。	
思考・判断・表現	国語では物語内での登場人物の心情を読み取ることや説明文での筆者の考え(要点)を適切にまとめて表すことができていない。算数では箱の中に入る球のイメージが先行してしまい、その奥にある問われていることの本質をとらえることができていなかったり、分かっていてもそれを正しい計算で解答を導き出せなかったりしていた。どちらの教科にも共通している傾向は、記述する問題に苦手がかり、長い文章題を目の前にすると、そもそも最初から解答することをあきらめてしまう無回答の児童も一定数あり、改善すべき点である。文章の読解や苦手の克服には読書の機会を多くもったり、普段の授業から同様の問題に取り組んだりする「慣れ」が必要だと感じる。	

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語の「正しい漢字に直す問題」や「主語・述語に当たる単語を選ぶ問題」に課題が見られた。国語では言葉(単語)の意味や主語と述語が離れていると関連をつかむことができないと考えられる。また、算数では「数と計算」での小数・分数の混じった時の計算のしかたや図形の面積や体積を求める公式が身に付いておらず正しく使いこなせないことがわかる。国語「書くこと」や算数「データの活用」では前年度に比べ、正答率が微増された。引き続き、授業の中で基礎的内容を繰り返すほか、解答だけでなく意味や考え方で触れ、類似の問題にも定期的に取り組ませて課題の取り組み方法にも慣れさせていく。	
思考・判断・表現	理科「エネルギー」「粒子」を柱とする領域では、二つ以上の結果(情報)をもとに正誤を判別したり、回答を得たりする問いに対してとても困難な児童が多くいることがわかる。実験や調べたことから正確な情報を導き出したり、その結果が何を説明できることになるのかわからないままになったりしていると考えられる。正しい知識を得るとともに、そのまとめが日常のどんなことにつながり、生かされているのか身近な話題と結びつかせるような取組や問いかけを講じ、児童の必要感に迫るようにしたい。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	C	朝自習の時間確保はできているものの、基礎・基本の定着を図り、多くの児童に身に付けさせたという段階にはまだ達していない。今後も継続して取組を続けていき、定期的定着の度合いを測っていく	学校課題研究の中で次の2点に取り組んでいる。 ①効果的な適用問題の取り入れ方を実践、協議して授業に活用する。 ②問題の量や質について考えつつ、反復させる。【毎時間5分程度】
思考・判断・表現	B	必要感のある設問の設定や表現力の向上をねらったICT機器の効果的な活動は一定の効果もあげていることが児童の意識調査からもわかる。一方でイメージを膨らませる、予想し、比較することが苦手な児童が一定数いることがわかってきた。	現在行っている取組を授業内で引き続き実施するとともに、思考の深まりや想像し、表現する力の向上のために、読書や読み取った内容を他者に伝える活動、読み聞かせ活動の実施機会を確保する。【週1回実施】

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)